

もうひとりの 太平洋戦争

障害者の太平洋戦争を記録する会 編

代表
仁木悦子



立風書房

もうひとりの 太平洋戦争

日者の太平洋戦争を記録する会 編

仁木悦子

立風書房

もうひとつの太平洋戦争



1981年7月10日 第1刷発行

定価 980円

もうひとつの太平洋戦争

編・代表 仁木 悦子 障害者の太平洋戦争を記録する会 ©

発行者 下野 博

発行所 株式会社立風書房

〒二四一 東京都品川区東五反田三―六―一八

電話 東京(四四七) 一一九一(代表)

振替 東京五―七四四九三

印刷所 壮光舎印刷株式会社

装幀 安彦勝博

(乱丁本・落丁本はお取替えいたします) 〇〇九五―七〇〇―一一八九〇九
Printed in Japan 1981

もうひとつの秩序にむかう眼

「もうひとつの太平洋戦争」によせて

鶴見俊輔

からだが丈夫というのは、たしかにありがたいことなのだが、それをそのままうけとって、その上にくらしをきずいてゆくと、人に迷惑をかけるようになりかねない。そういう困った事情が、人間につきまといっている。

人間につきまとうこの逆説を、太平洋戦争をくぐった身障者の手記は、あらためて私たちの前にひきだして、見えることを余儀なくさせる。

この本におさめられた手記の多くが、からだが不自由なために、「非国民」と呼ばれていじめられたことにふれる。戦争をおしすすめることを第一のこととする軍国主義の立場からすれば、身障者はじやまものであり、きりすてられるべきものと見なされる。

小学校においてさえ、軍事教練まがいの訓練がはじまった時のことを、脳性マヒをせおう当時の三年生は、次のように回想する。

一糸乱れぬ分列行進の中に私が混じったらどういふことになるか？ 考えてみれば分るだろう。でも、初めの間は私もみんなと一緒に一所懸命にやっていたが、そのうちに先生が「きみはやらないでよいから、教室の前で立って見ていなさい」と私に命じたのであった。それは、私が混じるることによって、整然と行われるべき諸々の集団行動が乱され、みんなに迷惑をかけることになるからということにほかならなかった。また私自身もその頃になると、自分の障害というものを、かなり意識し出していたので、そのような集団行動にいくらかの苦痛を感じ始めていたため、「見学」を命じられたことにある面で「ほっ」としたことは否めなかった。かくして私は、教練を見学することになったのであったが、何時も見学している私に目をつけた軍配属の教官が、私のそばにやって来て、「おまえ、何時もそうやっているが、どうしてだ？」と問うて来た。私は、どういふ答をしたか忘れてしまったが、とにかく緊張して何か答えた。しかし、言語障害のある私の言ったことがその教官に理解されたかどうかは疑問である。教官は冷やかな目で私を見、「こんな馬鹿は学校に来る必要はないのだ」といふようなことを言いながら立ち去って行った。（山北厚 「戦争が私を小さくした」）

軍国主義下の小学校三年生の軍事教練。この場景の中で、脳性マヒのこどもが秩序をみだした、その切り口から、もうひとつの秩序の可能性が姿を見せている。そのように新しい光のおちかた（そし

て光のうけとめかた)を、戦後の今の日本の社会は、もはや必要としていないだろうか。

戦後の経済復興が実現した今、若さと健康美は、テレビの主題であり、またさまざまな広告の主題である。それは、収入のふえた若い人のふところをねらって、こびを売る商法でもあるのだらう。三十五年もつづいた平和の中で、人びとは平和にもあきて、ふたたび、軍国主義時代へのあこがれがうまれている。健康な若者がみずからの健康と若さにみちたりてくらす流儀の中で、平和への意志がそだつとは言えない。

戦争時代と身障者という対極のつくりだした思想上の主題は、今の私たちにとって、平和への意志をよみがえらせる一つのいとぐちである。健康に甘んじているものは、それなりに平板な世界の姿をつくりやすく、その故に、平和もまた退屈な、かわりばえのしないものに感じられてくる。健康者はこのようにもろく、このようにおろかだ。

十年前に、『妹たちのかがり火——戦死した兄さんを悼む』という文集を編んで、すでに初老の域に達した戦中派の男たちの間にとじこめられがちな戦争の記憶に窓をうがった仁木悦子さんが、身障者としての自身の経験の中から、ふたたび、平和への新しいあかりをともされたことに感謝する。

一九八一年 四月二十三日

鶴見俊輔

序

第一章 狂わされた足どり

谷三男

9

障害者と太平洋戦争

佐藤冬児

16

臥たっきりの半世紀

今井紀一

23

戦時下のころ

原田芳江

29

わが青春の思い出

長谷川正彦

38

私の人生

桜田雍子

49

あの時私たちはどうしてくらしていたのでしょうか

第二章 楽しい日々のはずだったのに

山北厚

57

戦争が私を小さくした

佐藤三郎

68

戦いの日から

後藤安彦

75

強いられた孤立

永井乃里文

84

忘れられない旧友へ

大森建悦

86

生かされている私

志波美智子

93

消してしまいたい日々

第三章 焼夷弾の雨を逃れて

横田弘

103

平凡な体験だが

萩原千枝子

110

そよぐ草

宮尾修

121

山と川と貧しさと

井村千恵子

127

あるとき、ある人、ある会話

第四章 聖戦のかけ声のもとに

宮里フミ

139

沖縄からの手紙

三浦清重

142

私の太平洋戦争体験記

柳沢アイ子

148

炎の中から

松田ハツ

153

満州の空を

船木鈴子

160

下駄

根木英夫

168

全身火だるまとなって

第五章 信濃路遠く

佐藤彪也

179

障害の児等とともに

秋山孝

186

集団疎開のころ

金沢英児	189	千曲川のほとりで 疎開中の日記から――
松本保平	209	太平洋戦争と光明学校

第六章 記憶の暗い切り口

羽鳥善市	223	私の歩んで来た道
前田ヤス子	233	身障者の戦中戦後記
島崎光正	236	凍土の季節
中島静江	247	古本を商う店で
金子浅次郎	255	くやし泣きしたあの日から
花田春兆	260	消しておきたい一句
横田淑子	267	ある夫婦の対話

仁木悦子	274	用語解説
	283	編集を終えて



第一章 狂わされた足どり

障害者と太平洋戦争

谷 三男

臥たっきりの半世紀

佐藤 冬児

戦時下のころ

今井 紀一

わが青春の思い出

原田 芳江

私の人生

長谷川正彦

あの時私たちはどうして

桜田 雍子

くらしていたのでしょうか

戦争はたくさん的人生を狂わせ押しつぶす。とりわけ
体の不自由な者たちのうえに戦争の重圧は二度と癒め
なおすことのできないひずみを残す――。

障害者と太平洋戦争

谷 三 男



● たにみつお

昭和二年（一九二七）高知県の須崎に生まれる。生まれつき視力及び言語に障害があった。本文にあるような体験をしたのち、敗戦後、製紙工、製紙補導所職員等を経て、昭和二十六年、闇米屋を開業、現在はそれが正規の職業となり、かたわらLPガスを商っている。敗戦直後から臨床心理学の本を乱読し、その知識に基づいて無料吃音矯正所をつくる。四十年、小学校に言語障害治療教室を設ける運動を起こし、四十二年、須崎市に治療教室をつくらせることに成功。その功績を認められて同年須崎市民賞を受けた。五十年須崎小学校内に情緒障害児のための教室を設けさせた。五十五年十月二十四日、県民こぞって障害者の福祉を高めようの高知県賞論文に一位入選。

★昭和十六年十二月八日 須崎の自宅で登校拒否中。

★昭和二十年八月十五日 須崎の高知県造船工場で造船中の船のなかにいた。

生まれながらの斜視、片目視力が極度に弱く、どもりであった私は、太平洋戦争中というものは、生きながらの死屍^{しし}であった。

誰が見ても容易に障害者と判別がつくならば多少の保護も与えられようが、一見健常者と区別がつきにくい私には、社会の目は冷たかった。

自殺すればすべては解決する。幾度かそんな考えが頭の中を去来した。いっそ戦争に行つて死んで

やろうか。——そんなふうに思いつめたこともたびたびだった。

昭和十五年、日華事変もどろ沼同様となった。軍靴の響きが高知県のこんな田舎まで聞えはじめ、学校に行っているか否かを問わず、すべての少年に軍事教練が義務づけられた。その頃私はどもる苦しみに耐えかねて、中学を中退し家でぶらぶらしていた。そんなある日青年学校へ通学せよ、という命令が役場から届いた。

人前ではどもるから集団訓練はいやだ。だから中学を中退したのだが、どうしても国はそれを許さないのである。思春期にもなっていた私は、どもりを苦にして、いまでいうノイローゼにかかり、うつ状態だったが、出席せざるを得なかった。どもりというものは、こういう状態の時は、人前で過度に緊張して、一言半句も言葉が出なくなる。名前を呼ばれても「はい」という返事がすぐには出ない。まして隊列を組んだ中での番号は、どもってしまつて言えないものである。

「返事が遅い。ところどころするな。番号くらい分らないのか」

訓練を受けるたびに叱咤された。

呼ばれると同時に返事をしなくてはならないことは十分知っている。頭の中ではわかっていてもでてこない。じたばたすればするほど余計に言葉がでてこないのである。分つてほしいと必死になつて祈るのだが、どうにもならないのである。

思い起こせば小学校三年の時だった。

新任の先生が国語の時間に、本が読める人は手を挙げてと呼びかけた。みんなの手がいつせいに挙がる。簡単な詩であった。私も家で予習していたので、自信があり、手を挙げたところ指名された。まさか指名されるとは予期していなかったこともあり、いささかとまどいながら本をもつて立ち上つ

た。だが読もうとすると、どうしたことか声がでてこない。顔は恥ずかしさで紅潮し、体はこわばってくる。ままよとばかり思いきり発音したとたん、あ、あ、あ、あと一音だけを連発して、どうしても次の音がでてこない。くやし涙が頬をつたい目の前がかすんでなにがなにやら分らなくなってしまう。

「もういい」

先生の声に私は、そのまますわってしまった。本が読めなかった、読めると手を挙げておきながら——そういう悔しさが、その時間中、いやその日一日中、私をせめたてた。

どもりだということを級友全員に知られてしまった。もう私はおしまいだ、そう思ってしまった。それから私は、国語の時間に一切手を挙げることをやめてしまった。学校なんかなければいいとどのくらい思ったか知れなかった。

この事件をきっかけにして、さまざまな幼児心身症が私をおそった。いくら便所に行っても排泄しきれないで、いつも小便が残っている感じがする。いや感じではない、ついさっき小便をしたはずなのにすぐもらしてしまふのだ。それもごく微量、ちよろちよろとパンツをしめらしてしまふのである。こんな状態だとして人に言えるだろう。

父親にも母親にも兄弟にも言えない。なぜこうなのか、一体私はどうなったのだろうか。小学一年の時の方がもっとしっかりしていたのではなかったか——幼い私は心を苦しめた。

中学一年の時「今日は地理のテストをする。本を読める者には及第点をやるから手を挙げろ」と言われた。私は手を挙げるわけにはいかない。読めない者が数人いた。私もその中の一人だった。読めない者は零点になった。

この地理の先生は柔道五段で、一日の大半は道場で柔道の練習をしている人だった。地理の時間でも、授業はそっちのけで武士道の話ばかりである。

そのくせ、話は教師の中で一番下手だった。武士道にかけては一番物識りなのは自分だとよく自慢した。そして中学一年の私等にとってよく理解できない言葉をしゃべりたてていた。

私は最初からこの先生を軽蔑していた。というのは時たま地理の授業をしても、教科書に書いてあることをならべただけで、肉付けのある授業はできなかったからである。

武士道の盲信者でしかない猪突猛進型の人間だった。天皇を現人神と信じ、上官にそむく者は天皇にそむく者だといつてはばからない。

私の通信簿をみて、誰もが首をかしげた。それは、数学、国語、歴史、作文、英語、公民、それらの点は優または秀であるのに、同じように暗記力、記憶力によって決まる地理に限って、零点なのだ。担任の先生も校長も首をかしげるだけで、何も言わなかった。柔道五段、武士道が恐ろしかったのだろう。

地理の点が零点。それは私が中学を中退する大きな要因の一つとなった。

この頃またこんなこともあった。

私の父は陸軍歩兵伍長であった。田舎での伍長は数が少なく、在郷軍人会の会長をしていた。私ができることについては、まるで理解がなかった。ちょうど前述の柔道の先生風なところもあった。

ある日のことである。父から煙突を買って来いと命令された。父の命令は、理由の如何を問わず絶対服従を要求された。だが、この煙突の「え」は、どうしてもって発音できない音である。何か紙切れに書いて、建材店へ持って行けば問題はないが、口がきけないと思われる屈辱には耐えられな

いので、店の前で、えんとつ、えんとつと盛んに練習しておいて中に入った。

「何か御用かね」と店主の声。どうしたことか、その声を聞いたとたん、呼吸が激しくなり、のどがつまるように感じ、言葉がでなくなった。両手を煙突ぐらいの大きさにして「このくらのえ」といったきり、いくら足をふんばっても声が出ないのである。たまりかねた店主が家へ電話して、注文の品は何かを聞いた。

家へ帰ってみると、品名を忘れるとはけしからんと父はえらい剣幕である。いきなり薪で尻を張りたおされた。私は理由の説明をした。だが、まったく取上げてくれない。完全な無視である。私は自分の部屋に閉じこもり、思いきり泣いた。死にたいと思った。障害者の心理なんて誰にも分らない。親だつて分るはずがないのだ。

まざくという方言がある。弱いのは殺して強いのをよりいっそう強く育てるという意味なのである。また父は「虎は子供を谷底に落とし、這い上ってくる強いのを育てる」という話を私によくした。言葉の裏に、弱い子は足手まといになるなよ、という悲しい覚悟を私にさせていたつもりではなかっただろうか。

どもるのは、どもることを気にするからだ。どもるということを気にさせまいとして、父はそういう教育を私にしたのかも知れない。だが、それは私をますます萎縮させた。そういう教育方法が軍国主義的教育方法なのである。教訓という点では有難いといわねばならないのかもしれない。だが、父のこの仕打ちは、悲しかった。

八十二歳で父は死んだ。晩年は、自分の若い頃の私への躰の誤りを深く悔いていた。あの頑固な父が涙をこぼして「辛く当った」と私に言ったことがある。種族保存のために、できの悪い子は捨てる

というかも知れないが、淘汰される側にとっては許すことがきない。

さて、青年学校に話をもどる。ここでももう耐えられる限度にきていた。私はある日、大阪の吃音矯正所へ逃げこんだ。家出同然である。そこで教わったことはどもりについての理解である。それだけでも救われる思いがした。いろいろな意味で自信がつき、二十日目には自宅に帰ってきた。それからある上級学校に受験し入学したのだが、ここもまた軍事教練、滑航訓練と厳しくやられた。有無を言わせない軍事教育である。こういうふうには絶えず緊張を強いられる教育というものは私にはむかない。人間としては真面目な方で、小学校時代品行について注意されたことは一度もなかった。その私がこうした場合では無能力者ということになってしまふ。この学校も一年いただけで退学してしまった。退学の決意をさせた一番の動機は、入学の時に視力表を暗記してごまかしたことに對する心の苦しみであった。

家に帰って再びぶらぶらしているうちに、国は太平洋戦争に突入した。

昭和十九年十月だったと思うが、兵役が二年繰り下り、私共少年を含めて徴兵検査が行われた。その頃神経症がこうじて腰痛を起こしていたが、検査を受けたら「第一乙種合格、山砲隊に編入する。申告せい」とその場で命令を受けた。申告とは、中央の壇上にいる金ピカの将校に、その日の検査結果を一人一人大声で報告することである。どもって声が出なくても、ままよ殺さば殺せ、と捨てばちになって、まっすぐ前に歩み出た。すると、そばにいた地元の教官が、まっすぐ歩けと注意した。

初めに書いたように私は片目が斜視である。つまり片目で歩いているので自分ではまっすぐ歩いているつもりが、実際は、ゆがんで歩いているのである。どうにもならない。その無理な注文に腹が立って「片目が失明で、まっすぐ歩けません」と言ったら、口答えするのか馬鹿野郎、と言われた。